市長賞

石垣りんの修行時代

のなか　夕子

石垣りんは銀行に勤めながら詩を書いた。小学校を卒業して14才で就職、というと幼いころから苦労したような印象を受けるが、実際は違う。彼女は働く道をすすんで選んだ。

この時代は尋常小学校の六年間が終わると男子は中学校、女子は高等女学校へ進む道と二年間の高等小学校へ進む道とに分かれた。高等小学校卒業後はたいてい就職した。

りんの親は総領娘を女学校に行かせるつもりだった。家は薪炭商で二棟六軒の長屋の大家でもあり、暮らしには困らない。りんが勤めに行く必要はなかった。行かないと言うりんに夜学でもいいからと父親は学校を探してきたらしいが、彼女はうんと言わなかった。

はじめは行くつもりだったのだ。それが月謝十円というのを知ってやめてしまった。日頃から父親の働く姿を見ていた彼女は、そんなお金を出させるくらいなら、いっそ早く社会に出て働き、その収入で気兼ねなく好きな勉強だけした方がいい、自分にはそれが出来ると考えた。学校で好きでもない学科を勉強するよりも自分

の好きなことを自分で学ぶと言う道を、彼女は選んだのだった。

『現代詩大辞典』（三省堂）にあげられている、大正生まれの女性詩人20人のうち、りんと病気による就学免除の二人以外は全員高等女学校、もしくは女子師範、女子大を出ている。女学校へ行って詩の書き方を習うわけではないが、詩を書こう、詩人になろうという意志をもった女性は、ある程度の教育を受けられた者だった。高等女学校は今の中学三年間に高校二年間を足した年限で、りんの就職の翌年の高等女学校進学率は16.5％。そこからさらに今の大学に当たるような教育機関に上がる者は極々少なかった。女性に学問はいらない時代だった。進学もそして文学を志すことも、とても贅沢な時代だった。

その中にあって女学校へ行こうと思えば行けたのに行かなかったりんのなんと強情なことか。りんの祖父はりんを「変わり者」に仕立てようとしたと言い、彼女自身もそれを自慢している節があるが、「変わり者」の面目躍如である。「変わり者」のりんは自分のやり方を貫き、彼女自身の方法で学び、詩を書いた。そんな彼女の修行時代をまとめた。

りんは大正15年、東京赤坂の仲之町尋常小学校に入学する。一年生から六年生まで、担任はずっと杉山末吉先生。読み、書き、そろばんをみっちり教えて下さった。特筆すべきは綴り方の授業。

〈方法は次の通りで、第一週の綴り方の時間には、銘々で書く。次の週に時間がくると、四人宛の組にわかれ、まわし読みをしてそれぞれ感想を書き入れる。さらに次の週が来ると先生は、クラス全員に向かって、自分が読んだ作品の中で良いと思うものを、手をあげて推薦させる。センセ、センセという声が、まだ耳の奥から聞こえてきそうです。

指名された生徒は教壇の横に立って、自分の綴り方を朗読します。そしてまた皆の批評や感想を聞き、最後に先生が点をつける、という順序だったと記憶します。〉（「綴り方」『焔に手をかざして』）

杉山先生は、このころ実践されていた「生活綴り方」の方法で授業を行なったようだ。この授業方法では自分が書くだけでなく、仲間の綴り方を読む。ただ読むだけでは感想は書けないから、自分で考え感じて、きちんと読む。批評することで自分との比較もでき、他者の目で見る力、他人を認める姿勢も養われる。推薦されれば自信もつく。自分勝手なことを自由に書いても、それを評価してもらえた。誉められたことで勢いづき、りんは綴り方に興味を持ち、雑誌や講談本などを読むようになった。

こうして読む力、書く力、そして主体的に考える力が、りんだけでなく、クラスの生徒たちに植えつけられた。同級生にはものを書くことの好きな人が多かったという。

戦前、りんは『女子文苑』、またその姉妹誌『断層』に作品を発表している。『女子文苑』には創作、短編、戯曲、童話、随筆、詩、小曲、童謡、短歌、俳句などの部門があり、彼女はどの部門にも手当たり次第投稿しているのだが、詩よりも散文の方ができが良い。十代の少女があっさり上手に詩を作れるようにはならない。りんは「綴り方」の授業で基本的なことを身につけ、書くことには慣れていたから、詩はともかくまず散文で力を発揮することができたのだろう。創作「荷」は女子文苑賞を受賞した。私は、貧しい生活の中でけなげに生きるこどもの心の機微を描いている何篇かの童話に惹かれた。

読み書きの基本と同時にりんが小学校で身につけたのは朗読だった。りんの朗読はローレライになぞらえられたこともあるほどだが、その原点は、仲間から選ばれて自分の綴り方を朗読した小学校の教壇にある。後年、りんは講演に呼ばれることが多々あったが、そこで自分は話などできない、詩は下手の横好き、などと、謙遜も過ぎれば嫌みに思えることを言っている。では、なぜ引き受けるのかということだが、講演はさておき朗読には自信があったからではないだろうか。

りんが就職すると決めて赤坂高等小学校へ進んだころ、ある出会いがあった。ちょうど学校が立て替え中で

氷川小学校に間借りしていた。氷川小は勝海舟の屋敷跡に建てられ、市立氷川図書館を併設していた。りんは図書館と出会ったのである。

国立国会図書館デジタルコレクションで、昭和8年発行の『東京市立氷川図書館案内』を閲覧できる。それによると、氷川図書館は当初、学校の教室に間借りしていたような状態だった。図書館が瀟洒（しょうしゃ）な窓のある洋風の建物としてようやく開館したのは昭和6年。（付け加えると、新館建築中に火事で蔵書を失うという災難に見舞われている。）つまり、りんが出会ったのはできたてほやほや、ぴかぴかの図書館だった。

『案内』によると、氷川図書館ではまず玄関で閲覧票を受け取り、閲覧室で持ち物などの始末をした後、書庫に入る。そこで本を選んで閲覧室に戻り閲覧するようになっていた。本の並ぶ書架と閲覧場所が別れているが、これも開架式図書館である。

閲覧室は40人ほどを収容できたが、これは男子席の人数。離れた一隅に婦人席があり、クッションの表面を広くした専用の椅子が用意してある。男女七歳にして席同じうせず、小学校でも三年生から男女別クラスという時代なのだから当然だが、軽くカルチャーショックを受ける。大正5年6月の閲覧者統計では、男性2826人に対して女性は9人という状況。児童室は扉でほかの部屋とは遮られるので少々子どもが騒いでも平気という気の配り様。小学校に併設されているだけのことはある。

しかし、りんは児童室へは行かず、たいてい空席の、肘のついた上等の椅子が置かれた婦人室を独占した。小さな少女がちょこんと椅子に腰掛けて真剣な顔で本を読んでいる場面を想像するとほほえましい。

『案内』には、氷川図書館の館員は役人根性の木で鼻をくくるような対応をせず、親身な対応で来館者との関係は非常に円満だった、と書かれている。りんも、子どもは児童室に行きなさい、などとは言われずに、小学校の学芸会のようなとき、詩の作品の展示を「見てきたよ」と声をかけてもらったり、いらなくなった綴じ穴のある少女雑誌をもらったり、と親切にしてもらった。居心地のよい場所だったのだ。

りんは学校が終わると図書館へ行き、ずらっと並んだ詩の本を片端から読み、詩を書いた。読んでは書き、

読んでは書き、詩を自分のものにしていった。氷川図書館は、りんにとっての女学校、自ら見つけた学びの場だった。学校で学ぶだけが学問ではない。漫然と学校に通っても学問は身につかない。りんのような主体性のある学びこそ真の学びと言えよう。

〈氷川図書館には、勤めはじめてからもずっと世話になった。しんと静かな室内。あの本棚の列のあの辺。西条八十詩集、生田春月「象徴の烏賊」、サトウハチロー「爪色の雨」、深尾須磨子「呪詛」、三富朽葉詩集。ならんでいたなあ。あまり面白いとも思わず、どうして読みに通ったのだろう?〉（「田舎のアンデルセン」『焔に火をかざして』）

おもしろいのは〈あまり面白いとも思わず〉と言っていることだ。『象徴の烏賊』、『呪詛』などの題名は確かに面白そうではない。それでも〈読みに通った〉のだから、どこか、なにかしらひっかかるところがあったのだ。散文とは違う、詩の世界―ことばの力だけで構築される世界に彼女は魅入られてしまったのだろう。昭和57年に発表された「ことば」（『やさしい言葉』）は〈生き生きと／こころに浮かんだ詩の一行が／ふと逃げてしまうことがある〉とはじまるが、りんは生き生きとしたことばをどうにか釣り上げて新鮮なまま料理したくなったのではないか。

昭和9年4月、りんは日本興業銀行に就職する。

興銀は現在のみずほ銀行。元々は株券、債券の円滑な流通と長期設備資金の融資を目的として設立された、農工業を発展させるための特殊銀行だった。国の御用銀行ともいえる金融機関だったところに、りんが四十年もの間勤め続けたのは非常に興味深い。

興銀は比較的後発の銀行なのに古くさいところがあり、りんが就職したころは洋服を禁じた職場が少なくなっ

ていたにも関わらず、和服着用の規則があった。女学校出の事務員は着物に帯をお太鼓に締め、白足袋、通勤には下駄でもよかったが職場では草履。小学校出の事務見習員は着物に袴を着用、履物はかかとの低い靴。「はいからさんが通る」の紅緒さん、現在ならば女子大生の卒業式の服装である。りんは四十年近くたって卒業式の衣装に袴姿が多いことへの驚きを、感慨をこめ「巣立った日の装い」（『焔に手をかざして』）で書いている。

初出勤の日に出された昼食の献立は生玉子がのったライスカレーにえびフライとサラダ。食後にババロアとレモンティまでついた。就職の際、祖父が興銀を勧めたが、それはどこで聞いたのか、「食堂で食べ物の区別をしない」からということだった。その通り、上の人からりんたちまで同じように月額12円の昼食が支給された。りんの月給は18円だった。

食事は給料に対してアンバランスだったが、ほかの点に関してはきっちりと秩序正しい差があった。りんの身分は身分制度の一番下の「傭（やとい）」、事務員見習いの給仕だった。成績の良い人で三年、大体四年勤めると事務員に昇格する。事務員は守衛などとあわせて「補助員」で、「行員」は参事、主事、書記などという身分制度になっていた。

「給仕」というのは雑用係で、朝まず行員が出勤してくる前に机を拭く。あとは帳簿をあっちへ持って行ったりこっちへ持って来たりの使い走り、書類の写しなどのちょっとした事務手伝いを分担した。さっと立てるように、給仕の椅子には背もたれがなかった。

この程度の仕事だから、時間はたっぷりあった。それでりんはある日、少女雑誌を開いていた。すると上役の人に注意された。「読むなら教科書を読みなさい。」雑誌なんか読んではいけないと。上の者は監督者として下の者に干渉した。ありがたいような気もするが、学校の勉強が好きでなかったりんには、ありがた迷惑だっただろう。

勤め始めて四年目の昭和13年、りんは文書課事務員になる。

このころ、ほかの人もやっているからと、りんは規則を破り洋服に事務服を着て「足が見える」と注意された。昼休みに新聞を読んでいて、後からパッとはたき落とされた。たとえ休憩時間でも、職場で私的な目的で新聞を読んだりすれば、黙ってはたき落とされても文句がいえないくらい女性の地位は低かった。メニューは同じだが、食堂は男女別。親睦会に入会することも出来ず、寮の使用も許されず、職場結婚などもってのほか、行外で会っても挨拶さえしてはいけなかった。

〈気ままものの私が、少女のころから働くことでわがままを伸ばそうとし、そのためにしたがまんの分量を考えると、奇妙なおかしさがこみ上げてまいります。〉（「試験管に入れて」『ユーモアの鎖国』）

この術懐は心に響く。父親から人には「気まま者の娘」と紹介されていたりんが、好きなことをするための「わがまま」を通すために社会に出て、「がまん」する必要に迫られ、縮こまってしまった。小学校出という学歴に対する侮辱、女であるという差別を感じ続けて働く中で、勝ち気な性格だった彼女は、自分を卑下することで保身の術を覚えていったという。だが、詩の世界では、社会を冷徹に見つめ、歯に衣着せぬ物言いで世の矛盾をあぶり出した。その視線はこの職場、この社会から生まれた。彼女の修行場は職場であり、世間であった。女学校へ行っても詩人になったのかもしれないが、「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」「挨拶」「シジミ」「表札」などを書く詩人石垣りんにはならなかっただろう。詩を書くための「わがまま」が招いた「がまん」が、詩を書く「糧」ともなったのは、りんの詩によく表れる皮肉のようだ。しかし、りんは「わがまま」ゆえの選択を悔いたことはなかった。

りんは銀行に勤めながらもう一つの仕事でもあるかのように投書に取り組む。休日や帰宅後、投稿に精を出すが、すぐには採用されない。大正時代から雑誌の創刊が相次ぎ、『少女倶楽部』『少女の友』『少女画報』な

ど少女向けの雑誌も多く出版された。それに比例してりんのような少女も全国に大勢いて、ライバルは多かった。小学校を出たばかりの14才の子どもの作品は年上のおねえさん方にはかなわなかったのだろう。

毎晩夜更かしして投稿に精を出し、近所のおじさんに「りんちゃん、昨日も遅かったですね。」と言われた。そんなふうにがんばって手当たり次第に投稿して、『少女画報』、『新女苑』では詩、『蝋人形』では短歌、童謡、小曲、『児童文学』では童謡が採られた。

今の時点で確認されている一番古いりんの作品の掲載は昭和10年、16歳。『女子文苑』に詩と童謡が載った。この『女子文苑』が、りんの修行の場となる。初掲載から、ほぼとぎれることなく終巻の昭和16年8月まで、いずれかの部門でりんの作品は掲載された。

『女子文苑』はりんが就職した年に創刊された。『少女の友』、『少女倶楽部』などに比べて知名度は低いが、初期の選者には吉屋信子、濱田廣介、小川未明などがいたし、野上弥生子、平林たい子、北原白秋、岡本かの子、中河興一、円地文子などの寄稿もあり、他の少女雑誌にひけをとらない内容だった。

少女雑誌にはつきものの読者同士の交流会もあった。りんは東京在住という地の利を生かして、交流会はもちろん文学研究会、短歌研究会、俳句研究会と顔を出している。文学研究会では窪川稲子、川路柳虹、深尾須磨子、宮本百合子、船橋聖一などの文学者に会う機会にも恵まれ、会の内容を、〔評論〕や〔随筆〕としてまとめた。同じ年頃の文学少女たちと睦み合い、著名な文学者に逢うのは楽しかったことだろう。女学校へ行くよりよほどよい、と思ったにちがいない。

散文についてはすでに述べたが、『女子文苑』では、詩の分野に歌謡、童謡、小曲、叙情詩、自由詩、短章などの部門が設けられていた。（時期により異なる。）

それぞれの部門の定義が難しいのだが、りんははじめは叙情詩が掲載されることが多かった。ほかには野口雨情が選者であった歌謡、濱田廣介から酒井朝彦に選者が変わった童謡でちらほらと掲載される。これらは七五調で音数を整えるので、自由詩よりもかえってまとめやすかったのではないかと考えられる。恋のうたは飛

び抜けて独創的ではないが、自分の日々の思いを映したような叙情詩や子どもらしい素直さが表れている童謡は、ほのぼのとして好ましい。

図書館での詩の修練が実ったのか、自由詩も少しずつ採られるようになったころ、詩の選者が福田正夫に変わる。この福田との出会いが、りんを詩人にした。

福田正夫は大正デモクラシーの中で庶民の暮らしを題材に新たな詩のあり方を模索した民衆詩派の詩人。「民衆詩派」は文語を廃し平易な口語による詩の定着を図り、詩に民衆を登場させて一般社会に近づけた。福田が作詩し、小関裕而が作曲した国民歌謡の「愛国の花」は大ヒットし、多くの人に愛唱された。

彼は投稿者の中でも特に詩才あると見込んだりんたちに、同人誌の発行を勧めた。そして、女性だけの詩誌『断層』が誕生する。

同人はその時々で異動があったが、13人ほど。月に一回の例会がはじめは福田の自宅で行われ、福田は少女相手に詩論、方法論を熱心に語りきかせた。講義の後は必ず家庭料理のもてなしがあった。福田が先導し彼の家族も同行し、箱根や鎌倉などに遠足にも行った。

りんは編集を担当していたこともあって最も頻繁に福田家を訪れた。編集会議が終わると夜も遅く、途中の四谷駅までくるとその先赤坂見附までは乗り物がなかった。当時、四谷から赤坂見附へ下る長い坂は片側が宮家の邸、片側は外濠で、夜の12時前後というと人一人通らない、車も影を見せない、寂しいところだった。そこをりんは夢中で駆け降りて行った。それは彼女の青春の一コマ。若さという時間を一途に駆け抜けてゆく姿だった。

りんは福田から教えられたこととして、詩の方法、散文との違い、空白のリズムをあげている。実は福田は自身の詩を北原白秋から〈弛緩して散文的で、改行しなければ散文と見分けがつかない〉（「芸術の円光」）と批判されている。それゆえ弟子にはことさら厳しく、詩の在りようを指導したのだろう。福田は、「人を育てる人」であった。少女相手に詩を語り、その才を開かせようと熱のこもった指導をする大きさをもつ人がどれ

ほどいようか。福田の前で、りんは女だからと小卒だからと侮られることはなかった。福田の詩への姿勢、人に対する態度がりんを詩人にした。戦後、りんは小説を書こうとしたこともあったのだが、詩を選んだ。それは福田の情熱がりんに燃え移っていたからだ。

一九五〇年代、りんが『銀行員の詩集』において、仲間に抜きん出た作品を発表したのは、今まで述べてきた戦前からの修練のたまものだった。詩人は一朝一夕には生まれない。小学校で身につけた学びの基本、図書館での自学、職場、世間での学び、雑誌投稿での切磋琢磨、師福田正夫との出会い、どれが欠けても私たちの知る詩人石垣りんは存在しない。その修練のうち、「学歴」といわれるものは小学校のみ。この学歴でりんは苦汁をなめたが、果たして「学歴」というものさしは人の「学び」を、また人を正しく計るものだろうか。そうではないことを石垣りんの修行時代、また人生が証明している。石垣りんは石垣りん、それでよい。

参考文献

「現代詩手帖特集版石垣りん」思潮社　二〇〇五年
「現代詩事典」三省堂　二〇〇八年
「ユーモアの鎖国」石垣りん　北洋社　一九七三年
「焔に手をかざして」石垣りん　筑摩書房　一九八〇年
「女子文苑」女子文苑社　一九三四年～一九四一年
「断層」女子文苑社　一九三八年～一九四三年
「東京市立氷川図書館案内」東京市立氷川図書館　東京市役所　一九三三年
「石垣りん戦前作品一覧」竹中典子・西原大輔　広島大学日本語教育研究28号　二〇一八年
「日本近代文学大事典第四巻」日本近代文学館　講談社　一九七七年
「資料・福田正夫」福田正夫詩の会　教育出版センター　一九八五年
「白秋全集18詩文評論4」北原白秋　岩波書店　一九八五年